

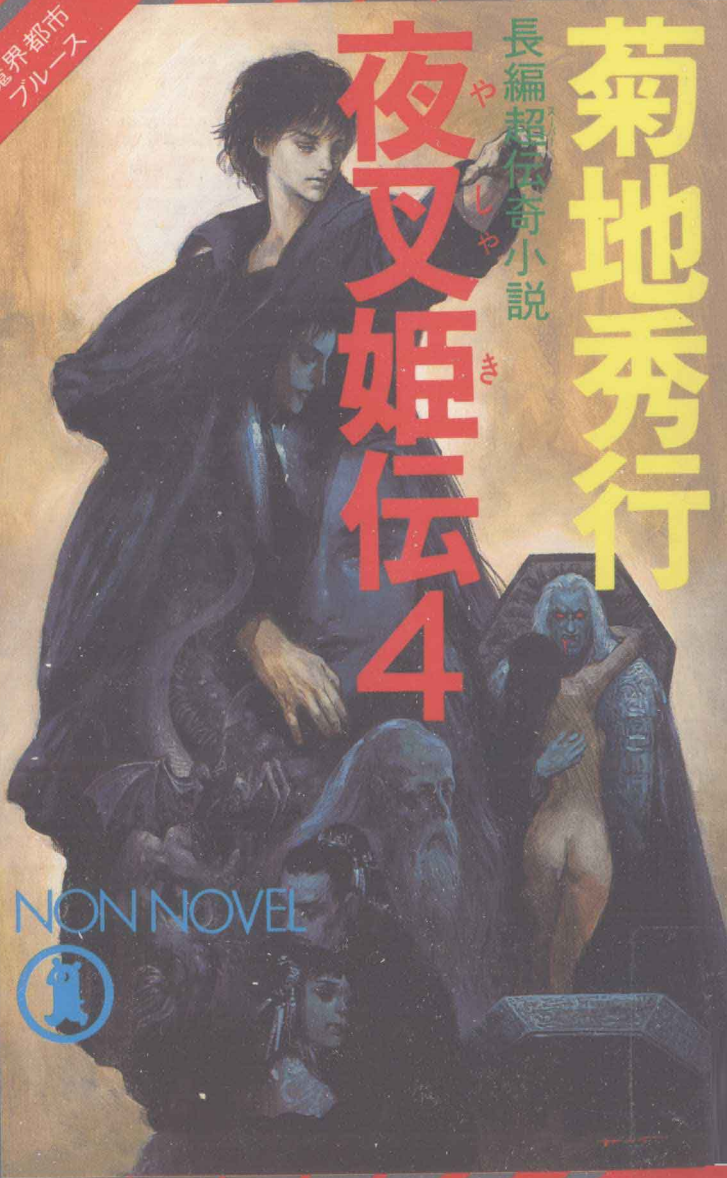
魔界都市  
ブルース

長編超伝奇小説

菊地秀行

夜叉姫伝 4

NON NOVEL





NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL-324

魔界都市ブルース 夜叉姫伝 4

平成2年7月20日 初版第1刷発行  
平成2年8月10日 第4刷発行

著者 菊地秀行

発行者 伊賀弘三良

発行所 祥伝社  
〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5  
九段尚学ビル

☎ 03 (265) 2081 (営業)

☎ 03 (265) 2080 (編集)

印刷 萩原印刷

製本 明泉堂

万一、落丁・乱丁がありました場合は、おとりかえます。Printed in Japan.

ISBN4-396-20324-1 C0293

© Hideyuki Kikuchi, 1990

長編<sup>スーパー</sup>超伝奇小説  
魔界都市ブルース

米<sup>ア</sup>地<sup>シ</sup>秀<sup>ヤ</sup>行<sup>キ</sup>  
儀<sup>ア</sup>叉<sup>シ</sup>姫<sup>キ</sup>伝<sup>キ</sup>4

祥伝社



目次

1章 遭遇美影身

2章 魔夜降臨

3章 魔者暗夜行

4章 裸女争奪宴戯

5章 美丈夫狂乱編

6章 呪殺太鼓

7章 夜叉舞

あとがき

228

201

169

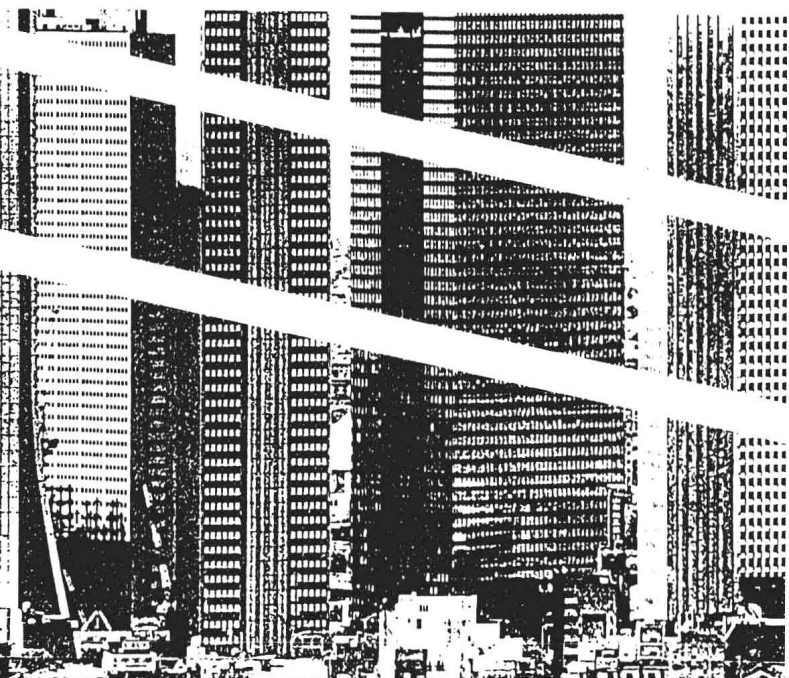
139

103

71

39

7



カバー&本文イラスト・末弥  
カバー構成・EE大林真理子  
純

〈物語に登場する主な人物〉

秋 せつら……………〈魔界都市〉でせんべい屋兼人捜しセンターを営む美麗の魔人。千分の

の一ミクロンの妖糸を操る。

メフェイスト……………死人をも甦らせる、恐るべき美貌の魔界医師。

美 姫……………安住の地を求め、四千年の時空をさまよう中国の吸血美姫。

騏 鬼 翁……………姫に仕え、〈新宿〉制覇の野望を抱く奇怪な老妖術師。

秀 蘭……………姫に付き従い吸血人形を操る妖女。

劉 貴……………妖琴「静夜」を爪弾き、姫に従う吸血鬼。魔気功を駆使する。

ベイ 将軍……………敵の武器を操ることができ、不死身の金髪碧眼の吸血鬼。

華南 高子……………中国古代史専攻の女子大生。夏の姉妃に憑かれ、事件に巻き込まれる。

夜 香……………〈魔界都市〉の戸山住宅を棲家とする吸血鬼で、姫に斃された「長老」の孫。

の孫。

ガレイン・ヌーレンブルク……………〈魔界都市〉の魔法街に住むチェコの魔道士。金髪碧眼の人形娘と大鴉を従えている。

マッシューズ少尉……………吸血鬼壊滅作戦のため派遣された陸自特務班分科隊長。

『夜叉姫伝 1・2・3』のあらすじ

〈新宿〉制覇の野望を抱く四人の中国人が、四千年の時空を超え、〈魔界都市〉に現われた。"姫"と呼ばれる美貌の吸血鬼に率いられた騏鬼翁、劉貴、秀蘭である。

不死身で中国四千年の業を駆使する四人は恐るべき敵であった。劉貴の魔気功によって、魔道士ヌーレンブルクが倒れ、味方につけた戸山住宅に棲む吸血鬼一族の"長老"も、"姫"の半顔を焼き一矢を報いるが斃された。そして、せつらを介護していた華南高子は、"姫"の毒牙にかかり吸血鬼と化し、さらに〈新宿〉行政中 榎まで吸血鬼化が進んでいた。彼らの陰謀を阻止せんとしたせつらは、秀蘭の毒牙を受け、ついに"姫"と"姫"の放ったベイ將軍によって瀕死の重傷を負った。だが、止めを刺そうと現われた秀蘭は、人形娘によって斃された。一方、"長老"の孫夜香は、"姫"たちを斃さんと隠れ家へ潜入するが、"姫"に捕えられ、メフィストは自ら吸血鬼の仲間となっていた……。

やがて〈新宿〉は、吸血鬼殲滅のため陸自特務班の外人部隊の介入を招き、新たに二つ巴の魔戦が展開されることになった。

人形娘の看護によって回復したせつらは、敵の本拠地中央公園へ乗り込むが、外人部隊の奇襲を受け、死闘の最中、公園に棲む悪夢貝の夢に促された。現実と虚無が交錯する奇怪な世界に取り込まれながら、せつらは、高子を拉致するベイ將軍を、棺の中へ追い込み、隠れ家へ続くとみられる洞窟を発見した……。



# 1章

遭遇そうぐう美影びえい身しん

鴉の報告を聴いてすぐ、せつらは足元へ眼を落とした。

深海を思わせる瞳が見上げていた。

「見つけましたわね」

可憐な声は弾んでいた。

「参りましょう」

答えずに、せつらは右手を棺の方へ向け、

「君はここでお待ち」

「え？」

不可解そのもの、といった表情で人形娘は秋せつらを凝視した。

「君と鴉に折り入って頼みがあるんだ。この棺の中のものを、夜の闇に溶け込ませてはならない。また、このまま、永久に眠らせておいてもならない。いま、棺には糸を巻いておいた。いかにベイ將軍と

いえど、たやすく出られまい。僕が戻るまで、見張っていてくれるものが要だ」

せつらは身を屈め、右手を突き出した。人形娘の鼻先で小さな黄金の光がきらめいた。

「君のご主人がくれた十字架だ。持ちなさい」

「そんな——秋さんにこそ必要です。ただだけません」

「これから目通りさせてもらう相手には無用の品だ」

せつらは人形娘の左手を取ると、掌の真ん中に十字架を載せ、五指を握りしめさせた。短くて固い指であった。

「短くて固い指」

つぶやいて娘は手を引いた。

「この手のおかげで、僕は生き永らえた」

静かに言っつてせつらは立ち上がった。美しい横顔の向いた先に、ヌーレンブルクの示した地点があった。

「ならば、わしが行こう」

大鴉の羽搏きにも、せつらは「いや」と言った。

「君は外の守り神と僕らをつなぐ唯一の鎖だ。そのうち、ミス・ヌーレンブルクが棺を開ける法を考え出してくれるかもしれない。ここに残れ」

「いけません！」

人形娘が叫んだ。悲痛な叫びであった。

「私がお気に召さないのなら、せめて、この鳥をずっとご一緒に。これから、秋さんのいらっしやるところは、この公園以上に怖い世界です」

「まったくだ」

せつらは、ちらりと眼の玉だけを動かして天を仰いだ。

幸いなのは、剽軽な動作に含まれた重みを、この場の誰もが理解し得たことだろう。

「この娘の言うとおりに。なに、わしは何もせん。

ただ、事の成行きを見守るに留まろう」

「僕と会えば、少なくとも今夜は妖姫も外へは出ら

れん。だが、カズィクル・ペイは別だ。昨夜の杭の贅を見ただろ。あれを繰り返させるわけにはいかないんだ。それに——」

「それに？」

人形娘の問いに、せつらは苦笑してみせた。

「僕が出掛けるのは仕事なのさ。あのお姫さまにプライドをいたく傷つけられた男に、居場所を突き止めるとの依頼を受けている。君らの力を借りたら、ギャラも半額になってしまうよ」

「どなたです、そんな——とんでもないことを要求する御人は？」

せつらの苦笑は、いっそう深くなった。

吸血姫を呪詛する、おそらくはもっとも恐るべき依頼人——その医師も今は彼らの仲間であった。

ガレーン・ヌーレンブルクは動けず、夜香は居所さえ定かではなかった。

そして、いま、空気は蒼茫と色彩を濃くしつつあった。

「行かせておやり。新宿一のマン・サーチャーを信じることだ」

鴉がヌーレンブルクの声で言った。

「というわけだ。——ミス・ヌーレンブルク、あんたも場所を変えたほうがいいよ。F隊の連中が仲間を探しに来るかもしれない」

「承知の助さ。気をつけてお行き。無事を祈ってるよ」

「ありがとう。——じゃあね」

せつらは娘と鴉に向かって言った。

ちょっと出かけるが、すぐに戻って来るというふうな口調であった。

「お待ちください」

人形娘が呼びかけた。

「ひとつ、気になることがあるのです」

「何かね？」

「秋さんは今でこそ生身なまみの人間ですが、同時に蜃しんの見る夢でもあります。いざというとき、夢に化けて

は、敵も手は出せませんが、秋さんもお困りでしよう。この笛をお持ちください——十字架のお礼です」

おずおずと差し出された手から、せつらはそっと小笛を受け取った。

「ありがたい。百万の味方だ」

「お元気で」

「はいよ」

「それから——」

人形娘の口調に、決意が混じった。

「棺の中の女性はご心配なく。私とこの鳥できっとお救いいたします」

せつらは身を屈かがみめ、人形娘の顔を真正面から見つめた。

「ありがとう」

「そんな」

「みんな片づいたら最初に焼いたせんべいを持ってお礼に行くよ」

「光栄ですわ」

娘は微笑した。

せつらは立ち上がり、背を向けた。

木立の間を遠ざかる後ろ姿を見送りながら、

「こんなとき、何と言えはいいの？」

と、人形娘が訊いた。

鴉の答えはもちろん、

「わからん」

のひと言であった。

鴉の口を借りてヌーレンブルクが伝えた場所には、灰色の巨木が空中を貫いていた。

大の男が一〇人で輪をつくり、ようやく抱えきれほどの幹は、豪快な一本の木ではなく、蔦状のものが無数に縊り合わさった集合体であった。

周囲を巡るまでもなく、「洞窟」は、すぐに見つかった。

幹というよりも地を這う根に近いねじれの間隙

に、ひと一人がようやく通れるほどの空間が象嵌さ  
れている。

図書館にこれほど近い場所に通路が存在すること  
は、さほど意外ではなかった。

ベイ將軍の壻が外にある以上、本来所属する妖姫  
の国への往復路も、その近辺でなくてはならない。

足も止めずに、せつらは大蛇のごとき根の間を  
縫って、洞窟へ近づいた。歩きながら、啞えた笛が  
鳴ったが、むろん、聴き止めるものはない。

ベイ將軍の棺はどうなるのか？

高子の運命は？

人形娘と大鴉の身の安全は？

陸上自衛隊特務班はどう動くか？

そして、ガレーン・ヌーレンブルクとドクター・

メフィストの行動は？

どれもが気にかかるはずであった。

後に遺したものは、見えざる影となつてせつらの

両肩を軋ませているはずであった。

だが、たそがれの光が突如、きらめきを増したかのような美貌には、美しさ以外の何物も留めず、せんべい屋の若主人は飄然と暗黒の洞に身を入れた。

闇が周囲を包み、熱を含んだ土の匂いがした。

三メートルほど歩くと、ねじれるような感覚が肌に伝わった。

それが消えると同時に——光が世界を照らし、せつらは水辺に立つ自分に気がついたのである。

古代中国の賢人たちなら、池と呼んだらうか。メフィストから耳にしていた水の連なりは、対岸を淡い煙で覆い、緑の山脈も遙か、そこここに点在する阿亭の風情、風の音を風楽と変えるがごとき樹々の味わいに彩られて、舟遊びよりも船旅こそ似つかわしい湖のように思われた。

山脈のあちこちに遠望できる細い銀色の筋は、滝だらうか。

血を好むものたちだけの本拠地とは想像もつかない風雅というべき光景を見廻し、

「水路はなし、船もなし。——では、どうやってやって来た？」

と秋せつらは、詩を吟ずるがごとくにつぶやいた。

「さて、どうしてであろうの？」

予期せぬという表現が、これほど決まる返事もなかったであろう。

ぼんやりと、しかし、愕然と振り向いたせつらの前で、女の長衣は、純白の花のように揺れた。

風がある。

「よく来た」

落ち着いた、荘厳とさえいえる深い声は、せつらの訪れを事前に看破している証左でもあろうか。

秋せつらさえ色を失う美貌が、不思議な笑みを浮かべていた。——右半分だけが、左の半顔は黒い絹のような髪のうちねりの後ろに隠れていた。

妖姫である。

そうでなくて、誰が秋せつらの背後に、気配も知

られずに立てようか。

「あの晩以来——ではないよね」

せつらは奇妙な返事をした。ある夏の一夜——彼だけが、訪れる四人を迎えたのだ。

「そのとおりで」

妖姫はからかうように言った。

「あの晩の後、私は一寸と離れぬところでおまえを見た。病院でのこと覚えておるか？」

「いいや。でも、他人のような気がしないな」

こういう台詞せりふがどこから出てくるのか。茫洋ぼうやうどころかぬけぬけとした返事に、妖姫は一瞬、凄まじい光を眼に止めたが、たちまち破顔した。

「さすがは、私のくちづけを身動きひとつせずにかわした男。どこか並外れておる。ますます、これから先の愉たのしみが増えたぞ」

「先はないよ」

せつらは、のんびりと言った。美貌を除けば、どこから見ても危険なところなどあり得ない若者で

あった。

「ほう」

妖あましく笑った女の首筋で、びう、と風が鳴った。

「おまえの病室の周りまわりに張ってあった糸か」

妖姫の喉のどに鮮やかな朱色しゆしきの輪が浮かんだ。

「似たような武器を操る糸使いと、三千年ほど前に戦ったことがある。また、逆戻りか。三千年の間——おまえは何をしておった？」

白い指が一本、細い輪の端に当てられ、ゆっくりとその上をなぞるのをせつらは見た。

指が離れたとき、死の色は消えていた。

「どう斬っても同じじゃ」

妖姫は淡々と口にした。

「おまえの腕はその糸使いよりも数等上。だが、私には同じこと」

「自慢話に來たのか」

せつらは、女の背後にそびえる壮麗な館を視界に収めながら言った。

「四千年生きても性格は直らないらしいね。いま、治してやろう」

「おまえの仲間の医者には、騏鬼翁が出迎えた。これまでも、私が直々に出向いた侵入者はおらん」

「礼まで言えって言うのか？」

せつらは呆れ返った。たつたいま、自らの攻撃が絶望的と見せつけられたばかりなのに、妙なことを気にする男だった。

再び空気が鳴った。

光が飛んだ。虹色であった。

せつらの放った妖糸は、女の頭頂から股間までを一気に断ち割り、返す刃でその胴も横に両断するはずであった。

「無駄と言ったぞ」

妖姫は涼しい声で瞬きした。

せつらは身動きひとつせず、彼女の攻撃を避けたが、こちら指一本動かさずに、彼の攻撃を無効とする。

せつらの防御が二度と効かないとすれば、これが四千年の差でもあったらろうか。

せつらは肩をすくめた。

「まだまだ」

「そこまでするおし」

妖姫が顎をしゃくった。傲慢な動作なのに、不愉快な印象はない。

「それほど私を斃したければ、一緒に来るがいい。階ぐらいいは見つかるかもしれん」

「どこへだ？」

「私の住まいへ」

白衣よりも白い手が壮麗な住居を指した。

せつらが動かないのを見てとり、

「気がかりか？」

と、妖姫は尋ねた。

「後に遺したものを振り返って何になる？ 最早、戻る道はないぞ。おまえの探している娘は死んだ。そのために来たのであろうか。あきらめよ。代わり



に別のものに会わせよう」

「困ったな」

「何がじゃ？」

「ちょっかいを出してみてくれぬいか」

妖姫は眉を寄せた。奇抜な申し出であった。

「それが望みか？」

双眸が爛々とかがやきはじめた。このわからず屋と憤怒したのであった。

「僕はおまえの首を刎ねに来た。——別の手が出せないわけじゃあないが、このまま、おめおめと招待を受けるわけにはいかないな」

「律義な男よ」

妖姫は吐き捨てるように言った。その気の赴くままに、犠牲者の喉を咬み破り、生き血をすすする。——それが、本来の性質なのであろう。

「ならば、いま、死ぬがよい」

右手が上がった。

せつらまで二メートルほど足りない。

白いものが、水流のように伸びた。長衣の袖であつた。

それが頬に触れる寸前、せつらは後方へ跳んだ。

水辺へ舞い降りた足元へ、白い布は慕うがごとく押し寄せ、次の刹那、それは女の袖口から鮮やかに離されて地に墮ちた。

「見事じゃ」

「誉めるなよ」

「袖を斬れたのは、おまえで四人目——四千年に四人。けっして多くはあるまい。来る気になつたか？」

「ああ」

「なら、来るがいい。地獄を見るのも一興。必ずしも怖いとは限らぬ」

女は背を向けた。

せつらの鼻孔を空気がうすく叩いた。

「ひとつ質問があるぞ」

せつらの声に、女はうるさそうに振り向いた。